

# 大学生のコミュニケーション能力育成のための 臨床心理学的カリキュラムの開発（10）

— 講義にとりいれたシンクペアの検討 —

○山本文枝<sup>1</sup>・西まゆみ<sup>1</sup>・西川ひろ子<sup>2</sup>・藤田依久子<sup>1</sup>・井西川京子<sup>3</sup>・高城佳那<sup>4</sup>  
藤沢敏幸<sup>1</sup>・船津守久<sup>1</sup>・

(<sup>1</sup>安田女子大学心理学部・<sup>2</sup>安田女子大学教育学部・<sup>3</sup>福山平成大学健康福祉学部・  
<sup>4</sup>静岡産業大学経営学部)

## 問題と目的

自閉症スペクトラムに代表される社会性の発達障がいグレーゾーンにいる大学生は支援につながりにくいため、大学教育の中でコミュニケーション能力を育成する支援のためのカリキュラムの開発を検討している。その際に、発達障がいにおける二次障害の発症にかかわる問題に配慮し、コミュニケーション・スキルの向上及び行動の変化に加え、自己概念の肯定的変化についても検討を行っている。また、この取り組みから全ての大学生の自尊心や自己肯定感を高め、社会に出るための意欲向上や自信の獲得につなげることを目標としている。本報告は、学部の講義形式の授業において、アクティブラーニングで行われる方法「シンクペアシェア」を応用した「シンクペア」を試行的に実施し、自己概念、コミュニケーション・スキル、自己肯定感の変化等について調査を行った。「シンクペア」は、課題について個別で考えた後、ペアになってお互いの意見を共有するという活動である。この活動では、自分の意見や考えを相手に伝える前に、自分でまず考えをまとめる時間が確保されている。また、自分の意見を肯定的に聞いてもらう機会を得ることになる。この「シンクペア」を講義形式の授業で実施し、前後の自己概念、コミュニケーション・スキル、自己肯定感の変化について調査した。

## 方法

**調査対象者** 講義形式の授業を受講している女子大学生 100 名（3 年生 30 名、2 年生 70 名）に実施した。分析対象は、調査に応じた 60 名のうち、実施前後のデータの対応ができた 26 名であった。平均年齢は 20 歳(SD=0.47)。

**調査時期** 2018 年 10 月～2019 年 1 月。

**実施方法** 研究者らが担当する講義 15 回のうち 6～7 回のそれぞれ一部(約 10 分)を利用して実施した。講義の最初と最後の回と、中間の回にお

いて調査を Web で行った。

**「シンクペア」の実施内容** 1 つ目の講義は 3 年生対象の教職の科目であった。教員は講義の最初に当日のテーマに関する課題を与え、シンクペアを行った。2 つ目の講義は、2 年生対象の心理学の科目であった。教員は講義の最後に本日のテーマに関する課題を与え、それをリアクションペーパーに書く前にシンクペアを行った。具体的なシンクペアの方法は、教員からの質問や課題に対して、まず学生は各自で考えてメモなどをした(約 3～5 分間)。その次にペアになり、どちらかがまず相手に自分の考えを伝え、次に相手の考えを聞いた(約 3～5 分)。ペアの組み合わせは任意としたが、必要に応じて教員が調整した。

**調査内容** 事前調査の質問項目は、①自己概念の形容詞(榎本(2002)から抜粋)、②自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)を 4 件法に修正した 50 項目、③コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs(藤本・大坊, 2007)6 因子 24 項目、④自己肯定意識尺度(平石, 1990)であった。事後調査で②を除外して行った。中間調査では、コミュニケーションワークについて思ったことと理由、授業の参加意欲等をたずねた。倫理的配慮として匿名回答と個人情報保護、成績評価に関係しないこと等を伝え、同意した学生が回答した。

## 結果と考察

全体での実施前後の各得点の差の検定を行ったところ、自己概念および自己肯定感、コミュニケーション・スキルのいずれにおいても差はみられなかった。ただポジティブな面において、自己概念の「積極性」が高まる傾向( $t(25)=-2.03, p<.054$ )がみられた。一方、AQ 指数と自己概念「明るさ」の実施前後の得点変化に負の相関がみられた( $r=-.459, p<.01$ )。このことから、実施においては十分な配慮と方法の検討の必要性が示唆された。